新潟県教育界における「学閥」問題（第九回）

にいがた県民教育研究所「学閥」研究会

第五章「派閥」の本質（その一）

今回はまず今春（一九八八年）の異動における「派閥」の公教育支配・利権支配の一端を明らかにする。つづいて「派閥」の本質についての検討を開始する。

A、一九八八（昭六三）年の異動にみる「派閥」の公教育支配・利権支配の実態

管理職ポストは各派閥の「指定席」
――校長の異動にみるポストの私物化――

今春の校長の異動は小学校で二二八名（新任一一五名、転任一一三名）、中学校で九一名（新任四九名、転任四二名）で、合計三一九名であった。ちなみに新任校長は昨年にくらべて、小学校で十六名減、中学校では十三名増であった。

さて、これら三一九名の新しく赴任した校長の所属派閥を調べてみると、前任校長と同じ「派閥」の校長は二九五名（九三％）にのぼる。したがって「校長派閥」が変更になった学校は三一九校（ただし新発田市立東豊小学校＝校長は「ときわ会」＝は本年度の新設校）のうち二三校（七％）にすぎない。校長の異動と「派閥」との関係を本年度異動のあった全中学校の場合について第1表に示した。また本年度の小中学校長の異動なともなう「派閥」の「収支関係」を第2表に示した。

校長の「所属派閥」が変更になった学校は小学校で十七校、中学校で六校である。これらの学校のほとんどが「小

第1表　1988年度中学校の校長の異動と「派閥」との関係

郡　市・中学校名	新任校長	前任校長	郡　市・中学校名	新任校長	前任校長
新潟市・鳥屋野中	ときわ会	ときわ会	新津市・第三中	公孫会*	公孫会
白新中	ときわ会	ときわ会	小合中	ときわ会*	ときわ会
関屋中	新陽会	新陽会	新関中	ときわ会*	ときわ会
二葉中	新陽会	新陽会	中蒲・愛宕中	新陽会*	新陽会
松浜中	ときわ会	ときわ会	白根市・第一中	公孫会	公孫会
坂井輪中	新陽会	新陽会	新飯田中	新陽会*	新陽会
藤見中	新陽会	新陽会	庄瀬中	公孫会*	公孫会
舟栄中	ときわ会*	ときわ会	燕　市・燕　中	新陽会*	新陽会
宮浦中	新陽会*	新陽会	三条市・第二中	新陽会*	新陽会
中野小屋中	青葛会	ときわ会	第四中	公孫会	公孫会
赤塚中	新陽会	新陽会	見附市・見附中	ときわ会	ときわ会
長岡市・堤岡中	ときわ会	ときわ会	南　中	ときわ会*	ときわ会
江陽中	ときわ会	ときわ会	今町中	ときわ会*	ときわ会
西　中	公孫会	公孫会	古志・山古志中	ときわ会*	ときわ会
関原中	公孫会	公孫会	栃尾市・半蔵金中	ときわ会*	ときわ会
太田中	公孫会	公孫会	三島・大河津中	ときわ会*	ときわ会
上越市・谷浜中	公孫会	公孫会	出雲崎中	新陽会*	新陽会
八千浦中	公孫会	青葛会	三島中	公孫会	公孫会
岩船・関谷中	ときわ会	ときわ会	小千谷市・小千谷中	ときわ会	ときわ会
神納中	ときわ会	ときわ会	東小千谷中	ときわ会	ときわ会
三面中	青葛会	ときわ会	片貝中	ときわ会	ときわ会
山北南中	ときわ会	ときわ会	北　魚・入広瀬中	公孫会*	公孫会
館腰中	新陽会*	新陽会	川口中	公孫会	公孫会
高南中	ときわ会*	ときわ会	十日町市・十日町中	ときわ会	ときわ会
村上市・上海府中	ときわ会	青葛会	南　中	ときわ会*	ときわ会
大栗田中	検友会*	検友会	吉田中	公孫会*	公孫会
岩船中	新陽会*	新陽会	水沢中	ときわ会*	ときわ会
佐　渡・羽茂中	ときわ会*	ときわ会	中　魚・川西中	ときわ会	ときわ会
真野中	新陽会	新陽会	中里中	公孫会*	公孫会
高千中	公孫会*	公孫会	上郷中	ときわ会*	ときわ会
深浦中	公孫会*	公孫会	南　魚・大和中	ときわ会	ときわ会
二見中	新陽会*	新陽会	六日町中	公孫会	公孫会
赤泊中	新陽会*	新陽会	城内中	新陽会*	新陽会
両津市・内海府中	ときわ会*	ときわ会	五十沢中	公孫会*	公孫会
水津中	青葛会	新陽会	塩沢中	公孫会	公孫会
北　中	新陽会*	新陽会	刈羽・西山中	公孫会	公孫会
新発田市・猿橋中	新陽会	新陽会	高柳中	公孫会*	公孫会
北蒲・乙　中	ときわ会	青葛会	中頸・吉川中	新陽会*	新陽会
安田中	新陽会*	新陽会	頸城中	公孫会*	公孫会
亀代中	検友会	検友会	豊草中	公孫会*	公孫会
豊栄市・岡方中	新陽会*	新陽会	東頸・浦川原中	公孫会	公孫会
葛塚中	ときわ会*	ときわ会	糸魚川市・第二中	公孫会	公孫会
長浦中	検友会*	検友会	姫川中	公孫会	公孫会
五泉市・川東中	ときわ会*	ときわ会	西海中	公孫会*	公孫会
東蒲・上川中	ときわ会*	ときわ会			
三川中	新陽会*	新陽会			
網木中	ときわ会*	ときわ会			

*印は昇任を示す。

第2表　1988年の小・中学校の校長異動にともなう「派閥」の「収支関係」

前任閥 ＼ 新任閥	ときわ会から	公孫会から	新陽会から	検友会から	青葛会から	女教員会から	無派閥から	差引
ときわ会へ	141	0	0	1	5	0	0	±0
公孫会へ	0	114	0	0	3	2	0	＋2
新陽会へ	1	0	25	0	0	0	0	±0
検友会へ	2	1	0	13	2	0	0	＋4
青葛会へ	2	1	1	0	2	0	0	－6
女教員会へ	1	1	0	0	0	0	0	±0
無派閥へ	0	0	0	0	0	0	0	0

（このほか統廃合により公孫会3、検友会1減、ときわ会1減、新設によりときわ会1増）

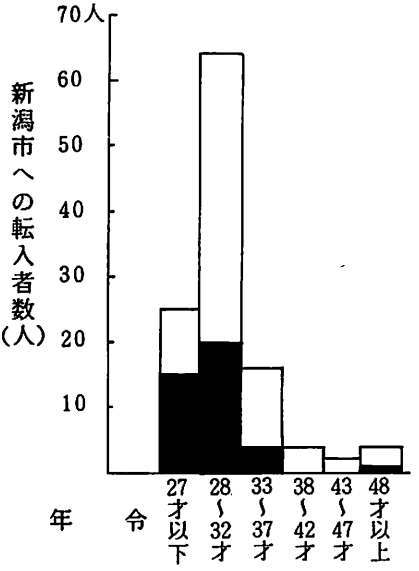
規模校」である。このうち中学校の六校すべてと小学校七校は消滅しつつある「派閥」である「青葛会」がらみの「変更」である。また小学校四校は「指定席」をもたない「女教員会」がらみのものである。三一八件の異動全体をつうじて「ときわ会」と「公孫会」の交替は一件もない。

「ときわ会」は「青葛会」から北蒲原・寺社小、両津・浦川小、佐渡・小倉小、北蒲原・乙中（きのと）、村上・上海府中の五校を「譲り受け」、新潟・中野小屋中と岩船・三面中の二校を「青葛会」に「譲っ」た。「公孫会」は上越・八千浦中、中頸城・岡沢小、栃尾・栗山沢小の校長ポストを「青葛会」から「譲り受け」、北蒲原・大出小を「青葛会」に「譲っ」た。この結果、上越市内での「公孫会独裁体制」は増々「強固」となり、上越市内の小中学校長「指定席」が「公孫会」でないのは小学校では三十校中ただ一校（和田小＝「ときわ会」）、中学校では十二校中二校のみ（城東中および高士中＝ともに「新陽会」）となった。また南蒲原・荒沢小には女性公孫校長が赴任した。「新陽会」は両津・水津中を「青葛会」に「譲り」、東蒲原・三宝分小を「ときわ会」から「得た」。

以上のような実態は新潟県の公立小・中学校の公的な管理職ポストが「派閥」という私的な団体によって私物化されていることをよく示している。ところでこれらの「管理職」に支払われる「管理職手当」は勿論「派閥」が支払っ

ているのではなく、国民・県民の血税から支払われている。現在「管理職手当」は校長で給料月額の十二％、教頭で十％である。給料月額を平均四十万円とすると新潟県内の小・中学校長・教頭に支払われている「管理職手当」の総額は年間十億円に達すると見積られる。また「ときわ会」、「公孫会」および「新陽会」相互の間でポストの交替がほとんど生じない「現実」はこれらの「派閥」による管理職ポストの「縄張り」が学校単位にまで徹底し、「極限・平衡状態」にあることを示している。

今春の人事異動にみる派閥の介入
――とくに新潟市・上越市への転入をめぐって――



第1図　1988年の異動による新潟市内への転入者の年令別・男女別人数(小・中学校)（黒ヌリは女性を示す）。

教員の人事異動にあたっても「派閥」が介入し、情実的利権支配を行っていることは「公然の秘密」である。今春の異動のうち、転入希望者が多いと考えられる新潟市および上越市への異動の実態をみてみよう。

今春の新潟市における一般教員の異動は小学校で一八六名、中学校では一七五名であった。このうち小学校五一名、中学校六十名の計一一一名が新潟市以外からの転入である。その年令別および男女別人数（小中学校の合計）を第1図に示した。第1図からわかるように二八～三二才の転入者が半数以上（六三名）を占めている。このことは教員のライフサイクルのうちで、この時期がその生活の拠点を確立する時期に相当することを示しているものと考えられる。ちなみに「念書期間」とされている六年間を終えると多くの場合二八～三十才となる。したがってこの時期の新潟市への転入をめぐっては「派閥」が利権を「効果的」に行使する条件が「備わっている」と懸念される。

今春の新潟市への転入者のうち、二八～三十才の教員は小学校では男十五名、女十一名、中学校では男二一名、女七名で、小学校についてはその一覧を第3表に示した。男性教員ではそのほとんどが「派閥」会員である。とくに「公孫会」の校長「指定席」である丸山小学校には二名の「公孫会員」が転入している。女性教員については「派閥」の介入は男性教員ほど顕著ではないが、「公孫会」校長の丸

第3表　1988年の異動による新潟市内の小学校への転入者と「派閥」（28～30才）

番号	年令	新任校	校長派閥	前任校	本人派閥
	(男)				
1	30	関屋小	ときわ会	北蒲・山手小	ときわ会
2	30	鏡淵小	ときわ会	白根・庄瀬小	ときわ会
3	30	女池小	ときわ会	佐渡・西三川小	ときわ会
4	30	豊照小	ときわ会	十日町・水沢小	ときわ会
5	29	上所小	ときわ会	北蒲・黒川小	ときわ会
6	29	濁川小	検友会	北蒲・米子小	ときわ会
7	29	坂井輪小	検友会	北魚・小出小	
8	29	丸山小	公孫会	北蒲・豊浦小	公孫会
9	28	丸山小	公孫会	小千谷・川井小	公孫会
10	28	東山の下小	ときわ会	新発田・赤谷小	
11	28	有明台小	ときわ会	北蒲・大長谷小	ときわ会
12	28	真砂小	ときわ会	佐渡・小倉小	ときわ会
13	28	坂井東小	ときわ会	白根・大通小	ときわ会
14	28	桜ケ丘小	公孫会	両津・両尾小	ときわ会
15	28	南中野山小	公孫会	燕・燕南小	
	(女)				
1	30	丸山小	公孫会	中魚・仙田小	公孫会
2	30	丸山小	公孫会	東蒲・下条小	
3	30	大形小	ときわ会	豊栄・葛塚東小	
4	30	入舟小	ときわ会	中蒲・亀田東小	
5	29	山の下小	公孫会	中魚・貝野小	公孫会
6	29	濁川小	検友会	十日町・八箇小	
7	28	桃山小	ときわ会	西蒲・巻北小	
8	28	牡丹山小	ときわ会	岩船・砂山小	
9	28	南中野山小	公孫会	三島・夏戸小	
10	28	松浜小	ときわ会	西蒲・和納小	
11	28	太夫浜小	ときわ会	新発田・二葉小	

第4表　1988年の異動による上越市内への転入者と「派閥」（30歳以下）

番号	年令	性別	新任校	前任校	本人派閥
（小学校）					
1	30	男	直江津南小 ※	中頸・南川小	公孫会
2	30	男	南本町小	東頸・須川小	公孫会
3	30	男	飯小	東頸・松之山小	公孫会
4	30	男	東本町小 ※	北蒲・高浜小	ときわ会
5	29	男	大手町小	中魚・上郷小	公孫会
6	29	男	直江津南小 ※	東頸・松代小	公孫会
7	29	男	大和小	中頸・黒岩小	公孫会
8	29	女	高田西小	中頸・櫛池小	公孫会
9	29	女	黒田小	糸魚川・糸魚川東小	
10	29	女	上雲寺小	東頸・高尾小	
11	28	男	大手町小	東頸・苫平小	公孫会
12	28	男	南本町小	柏崎・鵜川小	公孫会
13	28	男	高志小	東頸・松代小	公孫会
14	28	男	直江津南小 ※	東頸・原小	公孫会
15	28	女	和田小	中頸・筒方小	
16	28	女	南本町小	東頸・松之山小	公孫会
17	28	女	八千浦小	糸魚川・上早川小	公孫会
18	27	男	春日新田小	東頸・孟地小	公孫会
19	27	男	飯小	東頸・蒲生小	公孫会
20	27	女	南本町小	東頸・中保倉小	公孫会
21	26	男	諏訪小	中頸・川谷小	公孫会
22	25	女	大手町小	西頸・磯部中	公孫会
（中学校）					
1	30	男	城西中 ※	柏崎・鵜川中	公孫会
2	29	男	城東中 ※	東頸・沼木小	公孫会
3	29	女	城東中	中頸・村立妙高中	公孫会
4	29	男	津有中	長岡・山本中	公孫会
5	29	男	谷浜中	中頸・町立妙高中	公孫会
6	29	男	桑取中	新津・第二中	
7	28	男	城東中 ※	東頸・蒲田小	公孫会
8	28	男	城西中	小千谷・南中	
9	28	男	城西中	西頸・名立中	新陽会
10	28	女	城北中	中頸・柿崎中	
11	28	男	直江津中	長岡・東北中	公孫会
12	28	男	直江津東中	小千谷・東小千谷中	
13	28	女	直江津東中	中頸・妙高南小	公孫会
14	28	女	春日中	上越・城北中	公孫会
15	27	男	高士中	南蒲・下田中	公孫会
16	26	男	谷浜中	北蒲・京ケ瀬中	
17	25	男	城北中	糸魚川・糸魚川中	公孫会
18	25	男	城西中	新潟・藤見中	
19	25	女	直江津中	新潟・五十嵐中	
20	25	女	桑取中	南魚・六日町中	

※印は現職のまま上越教育大大学院に進学

山小学校および山の下小学校にはそれぞれ女性「公孫会員」が転入している。このように新潟市内における「公孫会」の校長「指定席」は「公孫会員」を情実的に転入させるための「出張所」としての役割も果たし、そのような利権支配を男性教員のみならず、女性教員にまで及ぼしている。また中学校への転入男子教員二一名のうちには、「ときわ会」と「新陽会」が六名ずついる。

このような「派閥」による人事異動への介入・利権支配は上越市内への転入についてはより顕著である。第4表に三十才以下の上越市への転入者の一覧を示した。その大部分が「公孫会員」であり、男女を問わず「公孫会」に加入しなければ上越市内に転入できないような状況がつくられている。なおこの中には夫婦そろって東頸城郡から上越市内の「中心校」に転入した「公孫会員」が含まれ、夫は現職のまま上越教育大大学院に進学した。ちなみにその父親は県教委義務教育課指導主事、上越市教委学校教育課長などを歴任した上越市内の現職小学校長であり、「公孫会」評議員、地区支部長および年度会会長を務めている。

共働きの教員が別離することなく、人間らしい生活のもとで仕事にうちこめるような人事異動は、本来すべての教員に公平に保障されるべきことである。しかしこのような「派閥」による情実人事の一方で、夫婦別離を強いるような異動が「平然」と行われている。

B、「多重人格」としての「派閥」の本質
――「派閥」の本質を斬る――

「派閥」はいくつの「顔」をもっている。それは「陽のあたる」場所では「良識ある教育団体」という仮面をつけてあらわれる。しかし、今までみてきたように「派閥」は「派閥」以上のものではないのである。

「派閥」の本質を考察するにあたって、まず「派閥」のもっているいくつかの「顔」、すなわち「多重人格」としての「派閥」の諸側面を「並列的」に検討することから始めよう。「派閥」の本質的諸側面は

①公教育を支配する「インフォーマル組織」としての「派閥」

②反民主主義的利権集団としての「派閥」

③「統制」と「競争」と「かばい合い」の機構としての「派閥」

④「国策的」教育追随・推進団体としての「派閥」

⑤反共右翼的・反勤労者的政治集団としての「派閥」

に整理できるものと考えられる。

1、「究極」の県教育界支配「ときわ会県庁支部」の「派閥」――公教育を支配する「インフォーマル組織」として――

第5表　各「派閥」の地区支部一覧（組合の支部との対応をあわせて示した。）

都市名	ときわ会	公孫会	新陽会		検友会	女教員会		教育学部同窓会	組合
（新潟県教委）	県庁								新教組＊
新潟市	新潟・西部	新潟	新秋会		新潟	新潟	下越地区	新潟	新潟市
	新潟・南部								
	新潟・中央								
	新潟・江東								
	新潟・山の下								
	新潟・東部								
	新潟・江南								
	新潟・阿賀								
豊栄市	豊栄	二市・北蒲	阿賀喜多会		北新	二市・北蒲		二市・北蒲	北新
新発田市	新発田								
北蒲原郡	北蒲・北部								
	北蒲・中部								
	北蒲・南部								
村上市・岩船郡	岩船・村上	岩船			岩船	岩船・村上		村上・岩船	岩船＊
両津市・佐渡郡	佐渡・両津	佐渡	柏会		佐渡	佐渡		佐渡・両津	佐渡＊
東蒲原郡	東蒲	中東蒲	東蒲	さつき会	東蒲	東蒲		三市・中東蒲	東蒲＊
五泉市	五泉		五泉・村松		中蒲	三市・中蒲			三市・中蒲
中蒲原郡	中蒲・村松								
	中蒲・亀田		新津						
新津市	新津								
白根市	白根		白根						
西蒲原郡	西蒲・巻	西蒲・燕	西陵会		西蒲	西蒲		西蒲	西蒲・燕＊
	西蒲・吉田								
	西蒲・大野								
燕市	燕					燕		燕	
三条市	三条	三南	三条・加茂・蒲	柏篠会	三南	三条・下田・栄	中越地区	三条	三南＊
南蒲原郡	南蒲							南蒲	
加茂市	加茂					加茂・田上		加茂	
見附市	見附		栃尾・見附			見附・中之島		見附	
栃尾市	栃尾	栃尾			長岡	栃尾		栃尾	長岡＊
長岡市	長岡	長岡	長附・古志			長岡・古志		長岡	
古志郡	古志							古志	
三島郡	三島	三島	三島			三島		三島	
小千谷郡	北魚・小千谷	北魚	小千谷・北魚		北魚	小千谷		小千谷	北魚＊
北魚沼郡						北魚		北魚	
十日町市・中魚沼郡	中魚・十日町	中魚	中魚・十日町		中魚	中魚・十日町		中魚・十日町	中魚＊
南魚沼郡	南魚	南魚	南魚		南魚	南魚		南魚	南魚＊
柏崎市	刈羽・柏崎	柏崎	柏崎・刈羽		柏刈	柏崎		柏崎・刈羽	柏刈＊
刈羽郡		刈羽				刈羽			
中頸城郡（頸北）	上越	柿崎	直江津・頸北	高陽会	中頸	上越	上越地区		二市中頸＊
上越市		直江津							
		高田	高田・中部						
中頸城郡（三和・浦里村）		中部				中頸・新井			
新井市・頸南		新井	新井・頸南						
糸魚川市・西頸城郡		糸西	糸魚川・西頸		西頸	西頸・糸魚川			西頸＊
東頸城郡		東頸	東頸		東頸	東頸			東頸＊
（高校）	高常会	（小・中に含む）							高教組
東京・県外	東京・県外	東京公孫会							

＊印は「派閥」内候補者が執行部を占めている組合を示す。

第6表　「ときわ会県庁支部」の構成メンバー（1985年）

（ときわ会会員名簿，1985による）

新潟県教育庁	
義務教育課	◦課　長
管　理　係	◦管理主事
指　導　係	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
特殊・幼児教育係	◦副参事（係長事務取扱）
〃	◦指導主事
社会教育課	
青少年教育係	◦社会教育主事
成人教育係	◦社会教育主事
〃	◦社会教育主事
〃	◦社会教育主事
総務課	
調査統計係	◦副参事（係長事務取扱）
〃	◦主　任
企画広報係	◦副参事（係長事務取扱）
〃	◦主　査
〃	◦主　査
〃	◦主　任
文化行政課	
文　化　係	◦社会教育主事
〃	◦主　査
曽和分室	◦文化財主事
保健体育課	
学校給食係	◦指導主事
学校体育指導係	◦指導主事
下越教育事務所	◦所　長
学校管理課	◦課　長
〃	◦管理主事
学校指導課	◦課　長
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
学校指導課	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
社会教育課	◦課　長
〃	◦社会教育主事
〃	◦社会教育主事
新潟県立教育センター	
学校経営課	◦課　長
〃	◦指導主事
教科教育課	◦指導主事
〃	◦指導主事
科学教育課	◦指導主事
〃	◦指導主事
特殊教育課	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
〃	◦指導主事
新潟県青少年研修センター	
研　修　課	◦指　導　員
新潟県少年自然の家	◦所　長
指　導　課	◦指　導　員
〃	◦指　導　員
新潟県視聴覚ライブラリー	◦次　長
	◦社会教育主事
新潟県保育専門学院	◦教務課長
国立磐梯青年の家	◦社会教育主事

各「派閥」は第5表に示すように、それぞれの地域組織（「支部」）をもっている。そのうち「ときわ会」には「県庁支部」という「支部」がある。「県庁支部」の構成メンバー（一九八五年度）を第6表に示すがそれは新潟県教育庁義務教育課をはじめ、県教育行政の「中枢部」に勤務する「ときわ会員」によって構成されている。

しかも、これらの「役職」は「ときわ会」の「指定席」（一部は他の「派閥」との「輪番制」）になっており、毎年、「県庁支部」構成メンバーの「役職」はほとんど変わることがない。したがって「派閥」という「インフォーマル組織」によって公教育行政の「中枢部」が支配されている上に、その利権的「指定席」化によって公教育支配の「継続性」までが「保障」されている。このような「派閥」による公教育支配は新潟県教委のみならず、これまでみたように市町村教育委員会にも及んでいる。「教育は不当な支配に服することなく行われなければならない」とする教育基本法の立場が教育行政に貫かれているかどうかを監視する立場にある県教育行政の「中枢部」自身が、「派閥」という「インフォーマル組織」によって不当に支配されている。しかも、重要なことは、国民から負託された教育という仕事の責任を「教育委員会」は負うことがあっても「インフォーマル組織」は教員や県民に対してその責任をとることがなく、また多くの教育要求をかかえた子どもの父母にとっても全く「手のとどかない」存在である。つまり「派閥」は公教育を支配しながらたえず「影武者」としてその責任をのがれているのである。

（つづく）

〔訂正・連載第八回（前回）第2表の説明文中、小中学校教員とあるのは小学校教員の誤りです。なお参考までに新潟県の高等学校教員の採用状況を資料室に示した。〕

一章　県内のいじめ……沼波貞夫
二章　実践記録
三章　実践記録から何を学ぶか……阿部好策
四章　父母・PTA・地域がいじめにどう対処するか……高橋武昌

頒価 550円
発行
にいがた県民教育研究所